
女神と悪魔と死にたがりやの哲学

空名 街

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神と悪魔と死にたがりやの哲学

【Nコード】

N3517V

【作者名】

空名 街

【あらすじ】

ただの高校生の啓介は突如として異世界に飲み込まれた。風景は普通の学校と変わらない。しかし、その世界は哲学的な概念が能力化する空間だった。生きることの意味を見出せない自殺志願者、通称ジャンキーどもと能力バトルを繰り返す啓介は死に物狂いで脱出を試みる。未由とかいうイカれた女の子に脅され、命の危険の中で能力に目覚めるのだった。

注 哲学にちよつと詳しくなれて、能力バトルを楽しめる作品を目指したいです。「哲学的な彼女」企画にだいぶ前、投稿した作品をリメイクしました。

哲学的じゃない彼女に告ぐ！

ただいつも通りに学校に登校しようとしていた。
それが、だ。

学校と歩道の境目、校門の間に立っている女の子に呼び止められた。丁度、そう同い年くらいの小柄な少女。同じ高校の制服を着ていたし、これといって不思議に思うこともない。

「あなたの来る学校じゃないよ」
「えっ」

啓介はすこし驚いて校舎を見た。やっぱり自分の通っている高校だ。一瞬自分に対して言ったんじゃないと思っただけど、何度見直しても自分を見ている。

なにいつてんだ、こいつ。

よく見ると、その少女の瞳の奥は紫がかっていて完全に普通じゃなかった。つり目のちよつと性格がきつそうな子だと思う。ふぞろいな短髪の右側を赤いゴムで、おなさけ程度にくくっている。

無視しよう。

そう、思った。

「いや、あなたの来るべきところじゃないというべきかな」

その冷たい声を振り切るように、学校の敷地内に入る。そしたら、なぜか朝の喧騒が嘘のように消えうせて、周りの通りすぎる生徒が溶けるようにいなくなった。朝の部活動の声も、道路をかきむしる車の音も、どこかに行ってしまった。ただ、その少女が校門の間に立っているだけ。

「どうなってるんだ？」

「だから、止めたのに……」

少女はあきれかえったように眉をひそめると、背を向けて校舎に向かおうとする。

とっさに無意識に呼び止めた。

「ちょ、どういうことだよ。なんか知ってたたら説明しろ」

振り返った少女は、何かを思い出したようにこちらに駆け寄ってくる。そして、そっけなく、本当にそっけなく、手を差し出すと言った。

「私は未由。よろしく。これから、殺しあうことになるけど」

啓介は全身汗だくになりながら、校門にある見えない壁にタックルを繰り返していた。三十六回目のタックルに失敗すると、尻餅をついて座り込んだ。ふとももが悲鳴を上げている。もう、立ち上がることすらできなかった。

「外に出られないじゃねーか。意味がわかんねえーよ」

「もう、わかったと思うけど、ここは校舎も含めて学校全体が閉鎖空間だから」

未由はポケットからイチゴの刺繍がしてあるハンカチを取り出すと手渡してきた。それを手に取り、啓介は頬にしたたる大粒の汗をふき取った。

「わかった。意味のわからないことが起きてるのはわかったからーから説明しろ」

「ここは誰かの形而上の意識が形而下にまで降りてきた世界って言うのかな。つまり、簡単に言うとな誰かの想像の世界ってわけ」

「はあ、ますます意味がわかんねえよ。そんなことがありえるのか」「別に信じなくていいけど、人の想念とか意念って言うのは決して現実世界から乖離したものじゃないよ。すぐ隣あわせにあるって言うのかな。表裏一体って言葉が適切かな。それがときに牙を剥くって言うのか」

「がああああ、余計わかんねえよ。ちきしょう。なんなんだよ。もう、家に帰りたいたっての、ちきしょう」

啓介は半泣きになりながら、両腕で顔を覆い隠した。

その様子を見ていた未由は、鋭く言い放つ。

「君って甘いね」

その言葉は、胸に突き刺さった。それがどうしてなのか。その次の言葉を聞かなくてもなんとなくわかった。だから、続きの言葉を聞きたくなかった。でも、簡単に言葉は続けられる。

「たぶん、もう帰れないと思うよ」

啓介は八つと顔を起こすと、未由を見上げた。

未由は人差し指を立てて。

「だって、この世界を作った人間は生きることには価値を見出してないから」

すこしだけ首をかしげた後、未由は話を続けた。

「なんでそんなことを知ってるんだって顔してるね。それはさ、ルール説明を受けてないからわからないんだろうけど、ここには数名の君と同年代の子がいるわけ。で、殺しあうことになってる。その同年代の子たちは全員生きることには価値を見出していない。だから、帰ることを前提として世界は作られてないんだよ。ただ、殺しあつて、お互いに生きる意味について結論を出すだけ。そもそも死んでもいいと思ってるし、もしかしたら死の淵に立たされると何かわかるかもしれないって思ってる。私も漏れなく、全員死ぬのも上等っていう前提で参加したんだけど、君は偶然なのか、それとも心のどこかで生きる意味を感じていないのかわからないけど、この世界に来ることになつっちゃんだね。逆にそこが私は面白くて、強く止める気にはならなかったけど」

こいつ、これから殺しあうって言つのに。

「あと、あと、面白いことにそれぞれの命題に応じて、能力が発露するようになってるから」

楽しそうに語ってやがる。

啓介は追い詰められれば追い詰められるほどに、絶望すれば絶望するほどに冷静になるタイプだった。ぶつぶつと呟き始める。

「つまり、簡単に言い表せば……」

現状という現状を把握し。

「とりあえず言えることは……」

今あるべき最善の方策を模索した結果。

「変態どもの集まりってワケだ」

そう結論付けると同時に。

現状において成すべきことは、日本の伝統文化にのっとり、誇り高き日本人が追い詰められたときに行動する、ことごとくの失敗を無に帰すための、圧倒的劣悪な状況を打開するための、美しい所作という所作と呼ばれる、負け犬根性の集大成とも言うべき。

「殺さないでください」

啓介はスローモーションで、土下座をお披露目した。

「ぶっ」

未由様は大層満足げに、破顔なされた。

間違いなく断言できることは、相手が女といえどもこのイカれた世界では能力とやらが発露したら、やばそうだったこと。現状においては、どんな手段を用いても、仲間は増やしたほうがいい。

つまり、土下座は何度でも使える至高の手段だったこと！

なぜ、そうなる、というツツコミは許さない。

死にたくなくば、土下座しろ、だ。

結果は、いかに。

未由に見下されながら、判決を下された。

「今は生かshとしてあげる。あとで殺すかもしれないけど」

助かったのか……

心の中から湧き出る安心感によって歓喜していた。

生きてるって、すばらしいいいい。

疲れも忘れて小躍りしていると、渋い男子の声が斜め後ろから聞

こえた。

「目立つところにわざわざいるな。本当に死にたがりは救えねえ。

おれと同じくらい」

強烈な殺気が、背中に突き刺さった。

渋い声を放った長身細身の糸目がやけに似合う男子は、げぼげぼと血を吐き捨てながら地面に倒れた。もう、何も語れないほどの無残に斬りつけられていた。首を貫通した刀は、地面にまで突き刺さっており、十数か所にまで延々と顔面を破壊するといつていいほどに攻撃されていた。赤黒く染まった顔は原型をとどめておらず、何かのゆがんだ銅像のように見えた。肉は飛び散り骨は砕け、頭蓋骨は裂けて脳が微動するのが見えた。

その返り血の先にいたのは、未由だった。

制服は血にまみれて、もう別世界の死に装束に見えた。

未由は振り返るところを軽く笑った。

「あはは」

なまめかしくも、恐ろしい微笑だった。

そのくせ白々しい笑いだった。

やばすぎる。

あいつが殺しあうとか言っていたのは、本当だった。どこかで思っていた悪い冗談だとか軽いノリは消えうせて、今は本当の意味で死ぬかもしれない恐怖が覆っていた。

「私の命題は我思うゆえに我あり、なんだよね」

イカれた能力だと思った。

彼女が急にかがんだと思った瞬間、ちょうど胸の部分に手を突っ込んで、何かを抜き出したときには男子を切りつけていた。その先は、もう思い出したくも無かった。

一方的な虐殺。

相手が能力を使う前に、殺していた。おそらく、「思う」ことによって自分の中から何か物体を物質化する能力なんだろう。どう考えても、反則的な力だった。

「思うから自分がある。それが真実だと。だったら、思えば刀だっ

てあっていいじゃないかって。そう考えたら、こんなこともできちゃうんだ。ふふ」

人を殺すことに何一つためらいがない。

やっぱり、ここにいる奴らはイカれている。

でも、それだけで考えをまとめたくなかった。

ひどい違和感を覚えていて。

納得できずにいる自分があつて。

だから。

「なんで、そんな簡単に人を殺せるんだよ」

「自分に生きる価値を見出してないから……」

「だからって、他人を殺すのはおかしくね？」

「それはどうかな。自分に価値を見出してないから他人にも価値を見出してないよ。そもそも人に価値を見出してない。だから、簡単に殺せちゃう」

「殺人鬼の心理ってヤツか……」

「まあ、そんなとこなのかな。わかんないけど」

「だったら、なんでお前は俺を殺さないんだ？」

「気まぐれ。単なるね」

そういつて未由は、無邪気に笑った。

血まみれの姿で。

頬に、こべりついた血をぬぐいながら。

「気が向いたら、殺すかも」

その言葉を聞いたとき、また家に帰りたくなかった。

心底、震え上がった。

こういうときに、またお得意のあの動きを繰り返すのか。機械的にそれこそ、繰り返すのか。恐怖しているのに、頭はひどく冷静で、逃げ出したいと思っっているのに、その場にとどまり続けて、何でか知らないけど、ふらふらと立ち上がって、無意識に近い形で言い捨てた。

「我思う、ゆえに我あり？ デカルトってヤツがいったのか知らな

いけど、そいつはアホだよ。アホすぎて話しにならねえ」

未由は大きく目を見開き。

すこしだけ眉を押し上げて。

信じられないほど、どぎつい声で。

「あっ？」

聞き返してきた。

一触即発。

いつ殺されても、おかしくなかった。

啓介は死と隣り合わせなのに異様なほど冷静だった。

「考えてみる。我思う、ゆえに我あり。自分を思えるから、自分が存在する。思えるから存在するなら、なんだつて思える時点で存在するってことじゃねえか。でもな、俺も二次元のキャラクターを思い続けた。しかし、存在しなかったんだよ。実在しちゃうれなかったんだ。やっぱりどこまで行っても空想だったんだよ。このイカれた世界なら確かにお前の命題通りかもしれない。しかし、現実世界に帰って見やがれ。デカルトの論は破綻してるから」

「だから、形而上って言葉があるんでしょ。つまり、意識とか意念の存在。目に見えない形をもつてない存在……」

「そんなこといい出したら、全部存在している。嘘だつて、思える時点で存在してるってことだろ。デカルトは完全にイカれてるよ。思えるからつて存在してるなら、すべて存在している。嘘も真実も、何もかもな。あいつは、我という唯一無二の真実を確信しただけで、すべてが存在したなんて言っただけ。もしもすべてが存在したと言いたいなら、我思う、ゆえに我ありじゃなくて、『思う、ゆえにすべてあり』でいいじゃねえか。我思う、ゆえに我あり、と最初にデカルトがその言葉を放った時点で、もうすでに論理的に破綻してたんだよ！」

注 実はデカルトの考え方は、批判している張本人の啓介に近い。すべてを疑って疑って、疑うことだけが真だと定義したのであって、未由の考えたように思うゆえにすべてが存在するなどは考えていなかったのである。

その言葉の嵐を浴びた後、未由はうつむき加減に胸に手を入れようとしたり。あのときと、同じように薄暗い表情で、空間のゆがみができるかのように胸に手がメリメリと入っていくはずだった。

だが。
なぜか。

その手は、入らなかった。

その代わりに、啓介の額から放たれた×印がすさまじい勢いで、未由の胸にぶつかる。それが手の代わりに、めり込んでいった。それから、何度も未由が自分の胸に手を入れようとしても入らなかった。

啓介は理解した。

「矛盾……それが俺の命題か」

おそらく、矛盾を看破されたら能力を使用することができなくなる。

命題自体を貫く能力。

それが自分のちから。

未由は事実として、あの物質化する反則的な能力を使えなくなった。これはたぶん、他の能力者にも当てはまることだろう。命題をひとつひとつ解決していけば、もしかしたら……

もしかしたら。

「土下座しなくて済むかもしれない」

そっちかよ、というツツコミは許さない。

誰一人、許さぬ。

しかし、希望が見えた気がしていた。

家に帰れる可能性が見えた気が。

一方、未由は困惑の表情で、何度も何度も自分の胸を触っていた。

立場は逆転していた。

立場逆転？

と思っただら、立場は逆転していなかった。

なぜかいまだに惨殺死体に突き刺さっていた血まみれの刀を引き抜くと、未由は振りかざしてきた。首元ぎりぎりで止めると、脅してくる。

「能力の封印を解け！ さもないと強制的に解除するぞ！ つまり殺すってこと！」

「ひいいい」

啓介は腰を抜かして、尻餅をついた。

どうなってるんだ。どうなってるんだよ。なんで、能力を封印したのに、前に物質化したものが消えてないんだ。

とりあえず、現状を把握しろ自分。

よくわからないけど、これから物質化はできないけど、いままでに物質化していたものは存在し続けるのか。もともとの理論がいくらか矛盾していたとしても、存在していた事実を消せないように、か、いや、それ以上になんて、こんな胸の奥につつかえる感覚があるんだ。

未由は重大な情報を語っている。

脱出するために必要な情報だ。強制的に能力を解除する、といった。殺して。つまり、命題を発動した人間を殺せば、能力が完全に消えさせるってことなのか？ だとすれば、この世界を作った人間を……殺せばいい。そうすれば、この世界から出られる可能性があるんじゃないか。逆に言えば、いくら矛盾を見つけて封印しても、殺さない限り能力は解除されない。つまり、出られないってこと。

間違いないと言えたのは。

絶対に帰るために必要なのは。

人を殺さないといけないってこと。

死の淵に立たされることによって、啓介の頭は空回りするどころか猛烈に回転していた。そして、気づく。目の前の事態に対処しないと、元も子もないと。

未由は待ちきれずに、刀をもう一度振りかぶった。

「死ねえええ！」

自分の能力を解除する方法なんて。

わからなかったから。

一秒にも満たない時間。

啓介はスローモーションで体勢を整えようと動き出す。

しかし、動きはじめでもう刀は距離を半分つめていて。

いくつもの残像を描きながら、迫ってくる。

この機に及んで成すべきことはたった一つ。

両手を地面に向かわせ。

頭をひれ伏させながら。

至高の奥義ともいうべき回避方法であり、物理的に刀をよけれられ、なおかつ精神的にも暴力を抑えられるかもしれない。

最善の策。

そう、土下座。

よく、わかつたね。君も。

友達にならないか？

だけど。

間に合わない……

刀が首を捉えようとした寸前、死を確信した瞬間。

「どーもども。シノシノって言います」

この危機的状況を打ち破ったのは間抜けな女の子の声だった。

銀髪の少女だった。丸っこい顔立ちの愛嬌のある狸みたいな大きな目のたれ気味のやさしそうな雰囲気の子だった。すらっとした背

の、しかしまったくそれとは相反するような豊満な胸の持ち主。制服を着ているという事実以外は、現実世界には存在し得ないようなすべてにおいて、最高の、つまりその。

めっちゃタイプの子だった。

二メートル以上ある、どこにそんな怪力があるんだよと思えるような巨大な銀色の古時計を背中に背負っている。そのせいで、前かがみになるから余計に胸のラインが強調されるようだった。というか制服のボタンを閉めなさ過ぎていた。

啓介は止まった刀に安堵し、冷や汗を頬に伝わせながら、いろんな意味で息を荒げる。

「ヒューーヒューヒューー」

何度かその銀髪の少女はこちらを見る。

目が合った。

「邪魔するな」「助けて」

銀髪の少女はその視線を横にやると、青ざめていった。高速で青ざめていった。隣にあったのは、無残にも惨殺された男子の死体であり、そりゃ誰でも引くだろうということは明確だった。

「ええつと、えと、えと……すいません、お邪魔でしたね」

「えええええうううう」

もう去るのかよ、という衝撃を受けて、しかも何もせず去ろうとする辺り、怒りすら覚えながら啓介は声を荒げた。

「助けてくれよ。てか、お前の命題のなんか能力使えばいいだろ。

この未由とかいう子、もう能力使えないから。勝てるって」

「ばかつ、言うな」

口止めのために、すぐに殺されそうだった。

必死に啓介は言葉を続けた。

「てか、それ以前に死ぬのとか怖くないんだろ。生きることには価値を見出していないんだろ。だったら、戦え。死ぬまで戦えばいいだろ！ ジャンキーどもよおお。あつ、そしたら、人を助ける気もおきないのか……」

言ってる側から自分の理屈が破綻していることに気づく。

銀髪の少女は両手を顔の前でフリながら、たどたどしく話す。

「生きることに価値を見出していないんですけど、そのあの……」

あまりにも似合う苦笑いで続けた。

「死姦マニアではないですから……」

「なに勘違いしてんだよ！」

いろんな意味で会話に押されて、未由が攻撃をためらっている。

助かる。

助かるかもしれない。

いや、何か方策を考える余地が生まれる。

このまま、とりあえず話を引き伸ばせ。

「てか、そもそも何しにきたんだよ」

「いやあーその、時間と空間の命題を話そうと思って。なんていうのか、よくあるじゃないですか。時間を早く感じたり、遅く感じたり、楽しかったら早いですし、つまらなかったら遅いみたい。あれって人間的な感覚ですけど、時計通りに本当に時間は流れてるの。かなって疑問を持ってて、ですね。それについて話し合いながら考えていけば、人間の一生の流れる本当の時間がわかって、人の生きる価値とかわかるんじゃないかって」

「話そうって……お前、案外と平和的なヤツだな。気に入った。それどころか、好きだ結婚してくれ。だから、助けてくれ」

「あ、関係ありませんでした。ではでは、死姦を楽しんでください」

「話がかみ合っていない」

そのまま、シノシノとかいう銀髪の少女は無視するかのようには背を向けて歩き始めた。ドシン、ドシンと地面をならしながら、立ち去っていく。

「まだ勘違いしてんのかよ！」

校舎の陰に姿が飲まれていった。

現実には容赦なく、時は止まってくれない。

当たり前のように姿が消えていった。

あの子に出会いたかった。

最初にあの子と出会いたかった。

あの日、あのとき、あの場所で、あの子に出会いたかった。

だってもう、殺されそうですもん。

「邪魔がなくなったね」

未由はそういうと、満足そうに笑う。

狂気の沙汰だった。

頬を引きつらせぎみに本当にうれしそうに笑っていた。彼女の場
合、おそらくそれが最高の喜びを表現する表情なんだろう。本当に
信じがたいことだが、ジャンキーだ、としか言いようが無い。

ぎりぎり握りこまれる刀。

その刃先が首元にスツとだけほんの少し入る。

じわりと血が出て。

にじむ。

鋭い痛みが首に走った。

啓介はひどく冷静に呟く。

「生きる価値について、知りたくないのか？」

「えっ？」

「いや、お前だって本当はわかってんだろ。死にたがりの自殺志願
者と話したって、わからないって。生きる価値を見出してないんだ
から、そりゃ聞いてもわかるわけねえよな。だから、俺と最初出
会ったとき、いつでも殺せたのに殺そうとしなかった」

「能力が封じられた今は状況が違うし」

「意味わかんねえぞ。状況が違うってどういうことだよ。最初から
お前が生きる価値を見出してない、その事実が変わらねえだろう
が。能力がそこまで必要か？ 生き残るために、か？ 生きる価値
を見出してないお前が、なんでそういう思考にいたる？」

未由は目を細めて険しい顔になり、自分の親指の爪をかんていた。
今、たたみかければ活路が開ける！

「お前の生きる価値、見つけてやるよ。一時間。一時間あれば十分だ」

「ホントに？」

「ああ、見つけられなかったら殺していいよ」

「わかった……」

一時間。

ハツタリだった。

本当に、ありえないくらいの斜め上のハツタリだった。

古今東西の天才、奇才、秀才たちが数百人がかりで何千年かけても結論を見つけられなかった人の「生きる価値」とか「生きる意味」についての答えを、凡才の極地で暮らしていた自分がたった一時間で見出せるわけが無かった。

今は朝の午前九時二十分。一時間後の十時二十分までに答えを出さなければならなかった。

「とりあえず、ここは変なヤツがいつぱい来るから校舎に入ろうか？」

「いいよ」

絶望的な戦いのはじまりだった。

眠い

九時三十五分、二階の教室。

最初から答えは見えていた。

わかりきっていた。

未由は相変わらず啓介の首元に刀を当てながら、机の上に座っていた。啓介は隣の席のイスに深く腰掛け、なにひとつ表情を変えずに菩薩のごとく、目を細めている。

啓介は悟りきった表情で問いかけ始める。

「なんで、お前は生きる価値とか意味を見出してないんだ？」

「死ねば終わりだから……」

「どついう意味だ？」

「死んだら無になるなら、何をやったつて最後は同じ。意味がない。どんな地位を得ても、どんな財産を築いても、どんなに立派な家に住んでても、最後は死んで、ハイ終わり。むなしくない？」

「そういう意味ではむなしいかもしれない……だが」

向かうべき答えは、たつた一つであり、ゆるぎない真実があつた。真理とも言つべき、その方向性に向かつて舵を切り、せつせと船を漕いでいる自分が居た。わかりきっている。まったく、考えるまでもない。近代哲学は出発地点からおかしかった。だから、無限ループ地獄に陥つて、まともな結論ひとつ出せずに、ニーチエとか言うヤツが振りまいたイカれた超人思想に染まる愚か者を量産してしまつたのだと、そんなことを思いながら、フフと不敵に含み笑ひする。

「お前は根拠のないことを言っている」

「なにが？」

「死んだら無になるということ」

「じゃあ、あんたは死んだら幽霊になるとでも思つてんの？」

「その問いが答えだよ。愚か者めが！」

啓介はクワッと声を上げそうになりながら、立ち上がった。

「死んだら幽霊になるということに根拠がないように、死んだら無になるってことにも最初から根拠がなかったんだよ！　つまり、どちらも証明されていない以上、お前の無になるという前提での考え自体成立してない。もしかしたら死後の世界はあるかもしれないし、ないかもしれない。それが今の人類の正しい見解であり、無になるという断定も幽霊になるという断定も根拠がなかったんだよ！」

論理的に考えれば。

「人類は、まだ知らない。それが今の結論だ」

啓介は人差し指を立てて、窓の向こう側にある空を指した。

「その前提を無視して考えを進めたから、おかしくなったんだ。まだ、お前は断定すべきじゃない。わからない、それでいいのさ」

ささやかな実証主義。

だから、いえること。

その先にあるひとつの答えとして現状を打開するために、選ぶべき最善。生きる価値を見出せない、未由に対して自分がとるべき行動。それがなんであるのか、あまりにもあまりにも明確だった。

まさか。

勘違いしていないだろうな。

愚か者どもめ。

土下座じゃねえ！

未由は何かに気づいたのか、冷たい声で問いかけてきた。

「答えになってないよね？　ていうか、時間稼ぎしてない？」

未由の表情が陰りを帯びる。

鋭い眼差しで睨みつけてくる。

つり目のせいで、余計に威圧される。

心臓をわしづかみにされた気分。

体中の血がわきたつようだった。

自然に呼吸が荒くなった。

「ヒューーヒューヒューー」

時計を見ると信じられないくらい時間が進んでいた。

十時三分。

もう、それほど時間が残されていなかった。

未由が座る机の脚に、自分の足をかけていた。

答えは至ってシンプル。

生きる価値？

知らねえよ！

トンスラこくに決まってるじゃん！

つまり、最初から逃げるしか無かったってこと！

逃げるチャンスを探すための時間稼ぎ万歳だよ。

今居る場所は三階の薄汚い男子トイレだった。ひとつだけ扉が閉まっている、ただそれだけの変哲の無い場所。

自分が取った行動が正しかったのか。

それを判断するとき、最初に上げるべきことはメリットとデメリットの比重かもしれない。しかし、本当の意味で、それを体験したら、やっぱりそんな冷静に判断することはできなくて。

だから。

単純に、激痛に襲われながら。

ふらふらと男子トイレの壁に。

もたれかかることしかできなくて。

足元には、ねばつくぐらい濃厚な血が大量にあって。

自分の足跡を延々と、なぞりつつけるぐらいあって。

それは全部、自分のもので。

つまり。

だから。

その。

右手から先を失っていた。

手首から先に制服の上着を巻いたとしても、とめどなくあふれる

血をとめることができない。元々黒い上着の制服が余計に黒く見えるくらい血に染まっていた。脈打つたびに、ドロドロの血が制服の布地を侵食して漏れ出して、ボタボタと落ちていく。もう、何も冷静に考えられなくて、二の腕で血を止めようって気すら起きなかった。

喪失感と脱力感が異常だった。

死が迫っている。

未由の机を蹴飛ばしたとき、それがわかっていたかのように刀を振り下ろされた。その反応に恐れおののきながら、背を向けて走り出していた。後ろで未由が体を打ちながら叫んでいるのが聞こえた。気づいたら、ありえないぐらいの激痛に時間差で襲われて、自分の右手首から先が切り落とされていたことに気づいた。

「だりい……」

嫌気が差して、天井を見上げながら、言葉を漏らした。

たぶん、きつと血痕を頼りにすぐに見つかるだろう。

どっちにしろ。

ジ、エンド。

当然のことながら、あんな短い時間で生きる価値を見出せるわけが無い。

時間切れでも死んでいたし、逃げても死んでたってわけ。

アホらしいぜ。

もしも今から奇跡的に助かったとしても、人の目に耐えて生きてく自信もないし、死ぬしかないかもな。もう、何もかも終わったんだって。そう、思ったら、なぜかさわやかな気持ちになる。あいつらの何人かも死ぬ間際には、そう思うのかな。それで、走馬灯とか走って、後悔するのか。

シノシノとかいう銀髪の少女が、おそらくこの世界を生み出したんだと。そんなことも想定したし、説得すればなんとかなると思っていた。けれども、もうどうでもよかった。

いろいろ考えようとしたけど、気力が萎えていた。

心が折れちまった。

そしたら、なぜかジャーと流れる音が聞こえた。

ひとつだけ閉まっていた奥のトイレがあった。

そのトイレの扉が、ぎしぎしとなりながら開いていく。

誰かが出てきた。

「ふあああーん、ねみいねみい」

こんなときに、また新しいイカれたヤツの登場か。

最悪の状況だった。

予想外

こつちを見ていた小さな女の子は、あおいと名乗った。とても、同年代に見えないくらい幼く見えた。飯をちゃんと食ってんのかつていうくらい細身の、明らかに貧乳の、小柄な子だった。奥二重で黒ぶちメガネをかけていて、髪は肩下セミロングで前髪ぱつぱつだった。くせ毛なのか頭の上で髪の毛が一本たっていた。

何より、不可解だったのは眠たそうにこつちを見ていたこと。なんで、こんな状況に遭遇しているのに眠たそうにできるのか理解できない。

死期を悟った自分も、冷静に、本当にひどく冷静に、その子を見返していた。

助からないことはわかってたから、なんかどうでもいいことをつつ込んだ。

「なんで、男子トイレにいんだよ……」

「あれ、ここ男子トイレなん？」

「いや、どう見ても見間違っわけねえだろ。とりあえず、入る前に標識っていうかなんか見るだろ」

「え、女子トイレやと思うんやけど」

「いや、普通に、ここにもこれが」

そうやって、改まってふと男子専用の小便器を見ようとしたら、なぜかそれ自体がなくなっていた。きれいさっぱり跡形もなく、なくなっていた。あるのはタイルの壁だけだった。

意味がわからない。

自分は確かに男子トイレに入ったはずなのに、女子トイレに変わっている。いや、それ以前に動転していて、女子トイレに入ってしまったのか。血が抜けすぎて、意識が朦朧としていたのか。

いったい、何が起きている。

いや。

動揺するな。

ただ。

問えばいい。

「お前の命題は？」

ああいはい、その問いに答えなかった。

くせ毛ネコののように、眠たそうに目を細めると。

「それ、治したるか？」

問い直してきた。

意味がわからない。

だが。

身の毛もよだつような笑い声とともに、廊下の向こう側、おそらく三階の階段付近から、完全に正気を失った人間の声が、けたたましい反響によって運ばれてきた。

「ぎゃはははは。もうすぐ時間切れだよ。どこに隠れたってわかるんだよ。早くしないと、殺しちゃうから」

もうすぐ側にまで、未由が迫っている。

十数秒後にはここに辿り着くだろう。

血痕を頼りに。

もう、唯一の助かるチャンスだった。

ひねり出すように啓介は言った。

「どうということだよ」

その問いすら、ああいはいは無視して。

「その怪我、どうやってしたん？」

「いや、刀で切り落とされて」

「その刀は、どこにあんの？」

「未由って子が生み出した刀で」

「そもそも、そんなもの実在したん？」

「むっ？」

実在した？ 実在したって、どういう意味だ。いや、そもそもこの世界の出来事は現実の出来事なのか。どうやって説明したらいい。

それ以前に、あの刀が存在したってことをどうやって証明すればいいんだ。能力自体も封印してしまったし、証明のしようがない。この怪我が、現にあるから、それを基にして。いや、でも、この怪我自体もどうやって証明すればいい。ここに見えているから？ これ単なる錯覚で、自分が見ている幻想だったら？ 脳が発生させている錯覚だったり、イメージに過ぎなかったから？

あおいは、言った。

「実証してみ」

こいつ。

「もうわかったと思うんやけど、あたしの命題は……」

イカれた。

気づいたら、右手が完璧なほど元に戻っていて、トイレにあったはずの血痕がすべて消えてなくなっていた。朦朧としていた意識もはつきりと戻って、最悪な状況から脱していた。

「実証主義やねん」

あおいは、あまりにも眠たそうに時間差で言った。

おそらく、実証できないことを無かったことにする能力。

消極的だが、とてつもなく強力な、ちからだと思えた。

未由の困惑の声が廊下から聞こえた。

「刀どこ？ なんで刀がなくなったの？」

攻撃手段を完全に奪えた。

勝負は、ついていた。

成すべきことはひとつ。

本当の意味で。

やっと。

話し合える。

そう思っていたけど。

たぶん、自分は廊下に出たときのとまどいを一生忘れることができないうらう。

刀を失った未由は、ただの頭のおかしな子に過ぎないし、無視してもいいはずだった。それこそ、相手にしなくてもいいはずだった。自分を何度も殺そうとしていた人間だったし、恐怖を覚えるものだと思っていた。あるいは嫌悪するものだと思っていた。

だが。

違った。

未由は無言のまま、突っ立っていた。さっきと打って変わって、子供のように突っ立っていた。何かを待っていたのか、それとも誰かを迎えに来たのか、わからない。わからないけど、これだけはいえた。

不可解だ。

どうしてって。

泣いていたから。

声もなく涙を頬に伝わせていた。

力なく、啓介は言った。

「なに、泣いてんだよ。そんな泣きおどし、俺には効かねえーから」
泣きながら俺なんか探すんじゃねーよ、くそつたれ。

全然、理解できない。

こいつら、全員理解できねえ。

なんなんだよ。本当に。

もう、知らねえーよ。

話し合う気が失せた。

でも、どうして、なんで、こいつらは生きる価値とか生きる意味とかわからないって、そんなこといちいち嘆いてるんだ。そんなに意味とか価値がわからないんだつたら、考えなければいいのに。それすらできないなら、勝手に死ねばいいのに。

なんでだよ。

それになんてそんなに知りたいんだ。

なんで。

その意味を知った先にあるのは。

そう考えた末に、ふっと言葉が出てきた。

啓介は静かに問いかける。

「本当は生きたいんだろ？」

未由はハツとした表情に一瞬だけなつて、それから徐々にもう一度無表情になつていった。うつむき加減になると、ぶつぶつと呟き始めた。

「お前は何もわかってない……お前は何もわかってない」

未由は廊下の窓に突然、手をかけると思い切り扉を開いて身を乗り出した。ほとんど無意識に近い反応で啓介は未由に飛びついて廊下に向かって投げ飛ばしていた。未由は驚きの表情で座り込んだ。

一瞬の出来事だった。

でも、ひどく、心が痛くて。

言葉が止まらなくなった。

「俺はジャンプが読みたいから生きてるし、モンハンの発売日を楽しみにしてる！ ポケモンだって最新作買ったばかりで、クリアしてないんだよ。お前ら、生きる意味とか価値とか、うるせーぞ。だまつて、漫画読んだりゲームでもしてればいいんだよ！ なんてそんなこといちいち考えてんだよ！？」

啓介は顔をくしゃくしゃしながら、半泣きになりながら叫んでいた。

未由は、ただそつけなく答えた。

「私にはそんなのないし」

その言葉が絶望的なほど重く感じた。自分が今までに覚えていた違和感が今、目の前にさらけ出されたような気がした。まるでなだれを打って、せき止められていたひどい現実が、姿を現したようだった。彼ら全員に共通して言えることは、現実世界そのものに対して、興味をもつてないどころか失望してるってこと。どんな過去があったのかわからないけど。

でも。

なぜか。

それがわかったただけで、啓介はちょっとだけ穏やかな表情になった、ほんのすこしだけ目を細めて、でも力がふつと抜けた顔になっていた。なぜかわからないけど、ここにいる奴ら全員をちょっとだけ許せたから。

「だったら俺がともだちになってやるよ……」

啓介は自然に出たその言葉に身を任せながら、そつと未由を見直した。

未由は声を荒げて。

「はあっ！？ なに調子に乗ってんの？」

「えっ」

「あんななんかと友達になりたくないし」
予想外の答えだった。

隣に存在

おうおうにして問題は想像以上にわかりやすく隣に存在している。つまり、なにが問題かといえば……

それ以前に、眠りにふける、あおいという女の子を背負いながら、廊下を歩いていた。すやすやと寝息を立てながら、やすらかな眠りについている。思っていたよりも体重は軽く、簡単に彼女は持ち上がった。

命の恩人であるところのあおいを置いていくのは忍びなかった。眠っているところを攻撃されたら危険だったし、睡眠中は当然だがあの反則的な能力も使えないようだった。しかもあ、物のようにあおいは女子トイレで眠っていた。手洗い場の鏡の前の洗面器に、まるで吸い込まれるような形にして、眠っていた。相当眠かったようである。いや、眠かっただけでは説明が付かないかも知れない。ヨガのポーズで眠っていたのだから……

万歳の格好で、斜めに体を伸ばしながら眠っていたのだから。

もう、やだ。この世界。それに。

他の問題も深刻ですもん。

未由の冷たい態度に対して、必死に自分は声を張る。

「同情なんかで友達になろうって言うてるわけじゃねえ！」

「う、うん？」

未由が勢いに押されている。

やはり、こいつは押しに弱い。

すべて、見切ったとおりである。

このまま。

うまいこと。

ごまかしてやる！

もしも、ここで敵対したら、刀が無くなったとはいえ、たぶんお

そらくであるが、鈍器で襲われる。イスで殴られる。机を投げつけられる。校舎から突き落とされる。あるいは目の前で飛び降りられる。

そんなことされて、たまるかああああ。

「確かに性格きついし、俺を殺そうとしたことをこころよく思っ
てねえよ。でも、お前にはお前の良さがある！ 気付いてないだけだ」

まだ、自分も見つけてないけど。

未由が顔をそらして、腕を組む。

この冷たい態度は、精一杯の抵抗。

「実はお前にも優しいところがあるだろうが！」

はったりである。

どこにあるのか自分が聞きたい。

人を当たり前のように殺せるヤツのどこにあるんだい。母さん。

「クールなところとか、たぶん、裏返しだろ。それは、お前の優しさの裏返しで、冷たく当たってるだけだ。優しくする方法を知らないだけだ。つり目なところとか、可愛いと思う」

未由のかすかに見える丸い頬と耳は、徐々に赤くなっていく。

「ま、まあ、そりゃねえ。あんたなんかと友達になりたくないけどさ、どうしてもっていうなら、まあしょうがなく？ みたいな感じ
でなあってあげてもいいけど、タダってわけにはいかないからね。普通
に考えて、あんたみたいなヤツとかと関わりたくないし、そもそも
も隣にいること自体、私からしたら、それはもう、なんていうのか
屈辱的なことだし、だから、まあ、その」

未由は、デレかけていた。

ちよ、お前。

普通に。

「惚れてまっやる」

なんて。

「って言うと思ったかあ！！」

ぎゃっと言って、未由はたじろいだ。尻餅をついて、パンツが見

えそうになるスカートを押さえた。意外にも足が長く、女子の中では身長が高いことにいまさら気付く。

なんか、いい加減にして欲しかった。

自分を殺そうとした人間に揉み手を使うなんて嫌だった。

「死にたいか、そんなに死にたいか。お前ら、バカだろ。どんだけ恵まれてると思ってんだ。アフリカでは生きてたくても生きれないヤツがいるんだよ。毎年、何万人も飢え死んでるんだぞ！（テンプレート）」

「アフリカに生まれたわけじゃないし」

「日本に生まれても世界は繋がってる。世界は一つ」

我ながら苦しい。

案の定、未由は強く返してくる。

「意味わかんないよ。日本人なのにさ、アフリカ人のこと考えて、ご飯残すなって言う人いるけど、アフリカ人だって日本で生まれたときから暮らしてたら、ご飯残すよ。戦前の人も平成に生まれたら、ご飯残すよ。それと同じように、その環境で変わるに決まってるじゃん」

「じゃあ、アフリカ行け。生きる意味を探すためにアフリカ行け」

「アフリカ、やだ」

もう、こいつら全員、爆発しろ。

ついでにリア充も爆発しろ。

爆弾もって、屋上から飛び降りてくれ。死んでくれ。確実に二度死んでくれ。一度じゃだめだ。二度死んでくれ。いや、むしろ、リア充こそ優先的に死ぬべきである。こいつらよりも、リア充のほうが憎い。圧倒的に憎いぜ。内臓を引きずり出してやりたいぐらいだ。あれ、矛先が変わってね？ めちゃくちゃ変わってね？ 冷静に考えろ。一切のひいきを抜きにして、公正なる目で見るのである。いたい、誰が死ぬべきなのか。神のごとき、采配を振るべきなのだ。

あおいは例外である。

命の恩人であるから、例外である。
シノシノも例外である。

たれ目が可愛いから、例外である。
それ以外のリア充爆死しろ！

もはや、神に公正など存在しなかった。

天変地異で善人も含めて殺戮する以上、この判断こそが神に近かったのである。

何度も、うんうんと頷いていると。

「なに、ひとりで納得してんのさ！」

未由の右ストレートが容赦なく、あごを打ち抜いていた。

視界が、ゆがむ。境界線がドロドロに変わる。

意識が落ちていく。

まずい。

こんな劣悪な状況で気絶したら。

未由だって、自分のことを許してるか分からないのに。

他にも意味の分からないヤツがいるかもしれないのに。

恩人を背負ったまま、こんなところで。

それは、死を意味していた。

「ちいっ」

啓介は目が覚めたら、生徒机に縛り付けられていた。反対側には、あおいが眠りながら縛り付けられており、身動きをうまく制限するように……できてる？ そんな疑問を抱きながらも、つまるところ、囚われの身になっていた。

どうやら、新たな敵は現れなかったようである。

唯一の救いはそれだけ。

今、目の前は自殺生中継のごとき、形相と化していた。

未由が窓を開けて、片足を掛けている。

あと一步のところ死ぬ。

ここは確か三階である。二階なら、まだしもこの高さなら死ぬ確率が上がっている。あきらかに歓喜すべきことであろう。あきらかにこの出来事を歓待すべきことなのである。幾度とも無く、自分を殺そうとした宿敵が、勝手に自滅しようとしている。生存確率が限りなく、上昇し、なおかつ、報復さえも完成させてしまう。ある種の、抱腹絶倒ものの勸善懲悪だ。
なのに。

「やめるおおおお」

なぜか心の底から叫んでいた。

未由は声を荒げて、にらみつけてくる。

「なんで止めんのさ!?!」

「それは……」

かつて啓介はテレビ番組のインタビュアーで答えていた。

『あなたは同級生の自殺を止めますか?』

『基本、止めませんね。勝手に死んどけて思いますよ。自由じゃないですか。ていうか、無理。絶対、見えないところは止めるとか無理。まあ、だからといって僕も鬼畜ではありませんから、止める場合もありますよね』

啓介の顔には重厚なモザイクが入れられ、元犯罪者特有の異常なほど低い声に修正され、テレビ画面上に映し出されている。

『どういった場合、止めるんですか?』

『目の前にいたときですね』

『普通の場合は死ぬと思うのに、どうしてその場合は止めるんですか?』

『後味悪いですやん』

インタビュアーは思った。

こいつ、自分のことしか考えてねえ。

まさに外道。

未由はゆっくりと、空中に足を差し出していく。体が傾いて、あ

とちよつと、体重を踏み込めば落ちる。徐々に窓際に全身が飲まれていく。

「止める理由……」

啓介は顔を上げて叫んだ。

「お母さんが悲しむからだろうが！」

嘘である。

思いつきりの嘘である。

だが、古巣の刑事が犯人を説得するために使う常套手段。まさにほとんどの犯罪者たちは号泣しながら、母のことを思い出す。ある者は自白し、ある者は投降し、ある者はカツ丼をむさぼり食らう。この方法こそが、王道。

「私、小さい頃にお母さん死んでるし」

「あつ」

「てか、刑事ドラマもの見すぎじゃん」

「いつ」

「何年前の人間だよ」

「うっ」

「もういい。死ぬ」

「えっ」

あと、ちよつとで「うっ」が言えるところで、未由は応答しなくなった。ちきしょう、あいうえおが完成してたのによ。理由なんて、理由なんて、いらねえだろうが。って何考えてんだ。自分。本当に胸糞悪い夢を見ることになるぜ。

あおいの方角を見る。

鼻に丸い丸い鼻水の風船をふくらませながら、穏やかに眠っている。

こいつの能力があれば、縄なんて解けるのに。
起きる。

さつきから叫んでるのに、なんで起きねえんだ。

夜更かしすぎたのか？

「ちきしょおおおお」

全力で立ち上がるうとした。圧倒的重量を持つであろう生徒机ごと、あおいを抱えて立ち上がるなど不可能に近いことなのである。縄で両腕を拘束されている以上、ほとんどの力は制限されている。と思っていたら、普通に立てた。

二足で立てた。

今度は未由が目を見開く。

「あっ」

「そりゃ、軽い機の重さがプラスアルファされただけだし」

「いつ」

「俺の怪力をもってすればねえ」

「うっ」

「あと、愛の力ってヤツ」

「えっ」

「とりあえず、手を取り合おうぜ」

「おっ」

言わせてしまった。

おつを言わせてしまったのである。

深い後悔と悲しみと嫉妬心の中、驚く未由に近寄り、服に噛み付いて窓から引きずり下ろした。未由の白いシャツのえりは、くつきりと自分の歯形が付いていた。犬に噛み付かれたかのような跡だ。未由はそれを何度もじろじろと見やりながら、跡を触っている。後ろのあおいは、ぶらんぶらんと揺れている。まるでシーソーに揺られて、わーいわーいと楽しむ子供のようだった。

つまり、あおいは起きていた。

最大の敵、目覚める。

今思ったら、お前じゃねえか。

あおい、ラスボス的な強さを誇るのはお前じゃねえか。

実証主義、最強説。

注 実証できなければ、簡単に何でも誰でも消せる。

大人のやり口

あおいを仲間にできれば無敵。

へいへい、あなた様の言うことは何でも正しいですよ。といて、もみ手で近づき、へりくだりながら、うまく取り入って、いろいと消してもらえれば、ほとんど負けることはありえない。そこに加えて、矛盾を貫く能力も、うまく使えば……いや、もう必要なかね？ 矛盾がどうか、めんどくさいだけじゃね？

とか考えていたら、あおいは大の字に寝ていた。

いびきをかきながら。

お腹をかきながら。

はしたない格好で。

「うああっ」

計画が頓挫し、膝から崩れ落ちた。

しかも、また未由という気難しい女の子と二人つきりという拷問的な状況に追いやられてしまったのである。あおいのような、ほんわか系の天使のような女の子がいれば、緩和されるかもしれないと思っていた状況が、まったく緩和されなかった。命の恩人である以上、へりくだるのは容易かった。褒め倒せるところなど無限にあった。だが、終わったのである。眠っていたら能力は使えない。すべては終わったのである。

あの夏の敗戦。

いや、この教室の敗戦。

家に帰りたかった。

ただ、すこし事態が変わっていた。

あおいをよっこらせと背負い、未由と一緒に廊下を歩く。

なぜか無言になって、未由の態度が変化しているような気がした。すぐに、飛び降りようとしていた雰囲気とは違って、すこし大人しくなって、これといって暴力も振るわなくなっている。従順になっ

たといえるかというのと、どうなのか分からない辺り、まだまだ油断はできないので、とりあえず大切な質問をぶつけみることにする。

やはり、これは更生したのか？

確かな叫びが届いたのか？

可能性は高いぞ。

必要としてくれる人間として認めてくれたのかもかもしれない。

「自殺とかしようとしてたけど、いきなりなんでやめて、その、なんていうのか、更生したんだ？」

未由は唇をとがらせながら、窓の方角を見て。

「気が変わったただけだし」

「どういうふうに？」

「あんた殺してから死ぬって」

未由は極めて冷淡な口調だ。

まったく、更生してねえええ。

元鞘じゃねえかよ。元々の形に戻ってる。明らかに戻ってる。いや、悪化してる。最初は生かしてもらえる可能性はあった。でも今は確実に殺すつもりだ。ああああああ、デレかけてたんだから褒めておけばよかった。褒めてさえいれば、こんな最悪な事態にならなかった。

いや、でも、むりっしょ。

褒めるのとか、どれだけハードモード。

だって、自分を殺そうとしたヤツだし、手首切断されてみるよ。どんだけ可愛い子でも、心のどつかでやっぱり怖いし、嫌だ。生きるためにそりゃ、大人は汚くねえとだめなんだよ。大人への階段なんだよ。へいこらへいこらしながら、生きなきゃなんだよ。でも、自分には無理だ。

自分に嘘をついてまで、生きたくないから。

未由の狂気を帯びた視線が窓際からこちらに向かう。

瞳が真紅に見えて、一本の赤い線を描く。

闇夜に光る、バンパイア様の目に見えます。

「いつ、殺そつかなあ」

嘘つきまくって生きてたいです。

汚らしい大人に成り下がってでも、生きてたいです。豚とののしられながらも、生きてたいです。鞭打たれながらも、生きてたいです。土下座量産マシーンとして、西日本一になっても、生きてたいです。大人のやり口。

現状を冷静に分析しようじゃないか。とりあえず今、分かっているこのルールを明らかにしよう。最終目的もはっきりしているとい。単に、未由に殺されないっていうのは第一関門に過ぎない。自分の最終目的はこの異世界から脱出すること！ そのためには、現状を何よりも整理しておかないとダメだ。生存率を一パーセントでも上げるために。

現状で確実に分かっているルール。

一 能力者が死んだら、その能力の効果も消える。
二 矛盾を貫く能力では、能力を封印できるだけで以前に使われた能力の効果を消すことはできない。

三 未由の我思うゆえに我ありは、何でも作れる（最強。封印済み）
四 あおいの実証主義は何でも消せる（最強。封印できてない）

当面の目標 未由に殺されないこと。

最終目的 この異世界からの脱出。

大切なこと 命の恩人あおいの保護。

絶対目標 シノシノと仲良くなる。

武士道である。

ここだけは日本人として譲れぬ。

今は、未由の能力を封じているとはいえ、決して戦闘能力では優れているとはいえない。走っても、あおいを背負っている以上は逃げ切れないのである。しかも、殴り合いでも勝てないことは右ストレートで分かった。腕力でもたぶん、負ける。めっさ負ける。生徒机を背負えたくらいじゃ勝てるわけがない。何か、根本的に別の生

物なんじゃないかと思う。あおいには期待できない今、何か他の方法を模索せねば。

未由は何かを想像しているのか、ニヤニヤしている。
分かる。分かるぞ。

君が考えていることは、だいたい分かるぞ。

「ふふ、どうやって殺そつかなあ。くり抜くところを決めないと」
いや、やっぱ分からんぞ。

分かりたくないぞ。

ぞ、が語尾につくのは仕様です。

怖いから仕方がないのですぞ。

とか、考えて、意味不明な現実逃避をしていると、廊下の先に誰かが立っているのが見えた。出っ歯のメガネをかけた学生服が似合すぎるぐらい似合う、勉強を極めんと欲するであろう、本性はオタクと推察できる。そんな、メガネ君なのであるが。
どうする？

この男子が現状を変えてくれるか。

案外と、こういうヤツは強かったりするぞ。

未由と戦わせよう。

うまく、やるうじゃないか。

能力が使えないことも暴露してやればいい。

で、二人とも死んでくれるとありがたい。

ありがたいえ。ありがたい。

「あの、この未由って子は能力が」

「あつ？」

ふうー何も無い何も無い。

いったい、どんな風に未由は相手にするつもりだ。

メガネ君は、か細い声でこちらに話しかける。

「あ、あの……」

距離がどんどんと狭まる。

「えっと、その……」

しかし、未由は廊下の天井を見上げて、首を時折かしげている。メガネ君が弱々しく右手を差し出そうとする。

「で、ですから……」
攻撃をしかけるのか？

その右手は未由に近づくものの、宙をかすめる。

為す術なく、通りすがった。

普通に、過ぎた。

未由の隣で平行して歩く自分も、当たり前のように通り過ぎていく。

「ちよつ、ちよつと」

メガネ君が戸惑う声を放つが、どんどんと小さく聞こえなくなっていく。

今の未由は、自分だけの殺戮世界を妄想し、話しかけても反応してもらえなかったのである。そして、自分はそれに戦慄を覚え、メガネ君に助けを求めることができなかったのである。刺激すると妄想が実行に移る。生きるために仕方がなかった。

いや、むしろ今ならば熱心に妄想しているから隙があるんじゃない。

「たつ……たすけ」

「あつ？」

未由は、一瞬で怒気を含みながら問い直してくる。

しまいには角を曲がってしまい、振り返っても誰も見えなくなっていた。

終わった。

外部に敵がいるんじゃない。

最大の敵は、内にあり！ いや……隣にあり！

未由は、呪い上げるように連呼する。

「逆さまに吊るし上げたい。あんたのことを逆さまにしたい」

「そつそんな、うらまれることを俺がしたか？」

「私のことを騙したじゃん。逃げたじゃん」

お互いの亀裂は決定的なものになっていた。

友達になるうなんて、そんなことができる状況じゃなかったんだ。

この子は、もう自分に対して不信感をもっている。

しかし、まだ払拭する手立てはあるはずだ。何か、ないのか。何か、そう、うまいこと口でごまかせないのか。それこそ、他に手立てを見出せるはずだ。今までだって、そうしてきたように、己の弁舌能力を信じようじゃないか。

まずは手始めに神妙な表情で。

「まだ可能性はある……君の生きる意味を探すことはまだできる」

「口先だけの逃亡野郎が！」

もう、罵られるレベルに達していた。

いま、生きていることがキセキなのだ。

明日、今日よりも……とかなんとかいってたら、著作権の問題が出そうだから、やめておけという声が聞こえたのでやめておく。

確信をもっていえることは、信頼回復不可能。

今の政治不信並みに不可能。

この状況を覆すことができたならば、政治家として国民に信を問えるレベル。口先の逃亡野郎と罵られるほどに忌み嫌われた状態から、オアシスのごとき、信頼を回復できることなんて不可能じゃないか。もしも、そんなことができたならば、それこそ指導者にふさわしい。人々の信頼を集め、優秀な人材を集い、この国を変えられる。

まあ、ざっと、その、つまり、今の状況を簡単に言っと。

絶対絶命。

背中であおいは寝息を立てて、すやすやと眠っている。赤ちゃんなのような、無邪気な寝顔と、死にそうな顔をしている自分との強烈な対比が、前衛芸術を生み出すかもしれないし、戦争映画のワンシーンに匹敵するほどの緊迫感を物語る。隣には、鬼畜な軍人が銃

をつきつけ……いや、女子高生が殺意の眼差しを自分に向けている。ただ、それだけなのだ。あおいを起こして、取り入ることができていない今、それだけなのに、もうアウト。

未由と目が合いそうになるたびに、顔を逸らして苦笑いする。

「まあ、いつでも殺せるじゃないですか。もうちょっと散歩しましようや」

商人風の口調で何とかごまかそうとする。

未由は両腕を組み、無言で歩く。

何を躊躇している。

この子は、今でも可能だろうか。

自分を殺せるはずだろうか。

なんらかのアクシオンを起こせるはずだろう。にもかかわらず、なぜ、攻撃してこない？ さっきの言葉には、どういった意味が含まれているのか。自分を拘束したい。そして、逆さまにしたいといっていた。

それは、何を意味する？

まさか。

逆さまな態度を求めているのか。自分の口先だけの、態度なんかじゃなくて、もっと信頼のおける逆さまの。本当は見つけて欲しいんじゃないのか。探しているんじゃないのか。生きる意味を。それこそ、友達を。

どう考えても無理だろうが。

未由が不信心を持っているように、自分も未由に対して不信心を持っている。信頼できる人間は、最低でも刀を振り回さないぞ。殺される可能性を考慮に入れて、自分から優しくするなんて聖人クラスの慈愛が必要だぜ。

確かに死にたい理由を認めた。それで、母親が幼い頃からいないっていうのも、なんか想像できないけど、不遇だっというのは分かった。だからって、それだけで愛するなんて無理だろうが。こちら、ただの男子高校生だ。しかも、死にたくねえ高校生だ。ちきし

よう、死にたくねえよ。死にたくねえ。家帰ってゲームしてえ。マンガ読みてえ。意味もなくネット徘徊したい。ゆっくり、グタグタ寝転がりたい。もう、何もしたくない。

そんなこと考えていても、解決されないって分かっているのに。逃避することでは現状を捉えられない自分が嫌だ。

逆さま……引っかかるのはこの言葉。

これが、自分の中でずつと重たく残っている。

何か、それが導いてくれるような気がして仕方がない。

そんなことを考えながら、二人で歩いていると、窓から校門前が見えた。最初に現れた男子が惨殺された現場である。いまだに死体が転がっているはずである。血しぶき飛び散り、それこそ無残にも脳髓をさらした男子がいるはずなのである。

だが、現実とは違った。

綺麗さっぱり何もなくなっていた。

血痕ひとつなく、死体自体がなくなっていた。

「どういうことだ？」

「さあ？」

考える。考えるんだ、自分。

これが、すべての分かれ目だ。

エンジン全開、すさまじい勢いで頭が回転していくのが分かる。

なんらかの変化。そう、決定的な変化があったはず。あの男子は確かに刀で惨殺されたんだ。未由が作り出したもので。そして、自分は矛盾を貫く能力で、物質化の能力を封じ込めた。それでも、刀はなくならなかった。死体もなくならなかった。あくまでも、能力の発動を抑えただけ。

その後だ。

原因がなければ、結果はない。

絶対の因果律。

ああ、そうか。

やっと、理解した。

ああ、お前の実証主義だ。お前が刀を消滅させた。刀が原因で、男子は死んだはずだったんだ。その刀を失くしたことよって死んだ原因が無くなり、男子は蘇った。丁度、切り落とされた右手が治ったように。それは、この異世界では因果律が現実世界よりも、もっと鮮明に機能していることを意味する。

証拠は無い。

他の能力者がいた可能性も高い。

だが、賭けるしかない。

そう、保身を捨てる。

逆さまに目指せ。

「分かった。分かったよ。俺を逆さ吊りにしてもいい。それで頭に血のぼって死のうが、てめえになぶられて殺されようが受け入れてやるうじゃねえか」

「っ？」

「その代わり、ああだけは助けてくれ……」

この子が生きていれば、もしかしたらすべての問題が。

未由は冷め切った顔で目を細めて答える。

「それは無理な相談かな」

二人、立ち止まって、にらみ合う。

ビチィっという火花が、お互いの間に飛び散るのを体感した。

「あ、あの……」

それを割って入るように、メガネ君の申し訳なさそうな声が聞こえたが、そんなことは何もなかったかのようにお互いに、にらみ合っていた。もはや、戦闘は……メガネ君の空気化は避けられるものではなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3517v/>

女神と悪魔と死にたがりやの哲学

2011年8月7日03時29分発行